転生

木本朱夏

川柳句集

転生

木本朱夏

序

木本朱夏さんは駿馬である。雅号からすれば、呂布の愛馬赤兎馬に類するが、実際は青い駿馬と、私は思っている。紺碧の秋空を、月明の蒼空を飛翔する。

川柳塔社は現在伝統派に属するので、『川柳塔』誌上では個性を押さえているが、仲間に比べて地方の柳人との交流が豊かだから、句はおのずから漸新である。

一般に感性豊かで縦横に視野を広げ、人生を採集した句は変化に富み、鑑賞者の興味を深くするが、いささか軽い印象を後に残す。朱夏さんの句にそれがないのは、真実を詠っているからである。

靴を履きつぶして父は風の中

藪柑子母の我慢に灯を点す

コンビニのあかりを目指す漂流者

アスパラの青よ少年老い易し

いまここにいるわたしとは誰だろう

謎解きの下手な男を道連れに

時雨きて身を庇うもの何もなし

失った時間を抱いているたまご

こいびとをかえるわたしのころもがえ

キコキコと自転車を漕ぐ逃亡者

朱夏さんのこれからの課題は、感性豊かな技巧に、重量感と余韻の濃い五、七、五、にのっとった句語の選択である。往きて復るの心である。老成するにはまだまだ早いが、麻生路郎先生の句を見詰め直して欲しい。これからの大きな課題の一つだと思う。

路郎先生は私に「視野無限」を提示して下さった。私は朱夏さんに「往きて復る」の実践を奨める。

いらくさで編んだ冠ならあげる
海の青ひとつぶ耳にぶら下げる
生ぬるいトマトを齧るヒロシマ忌
猫を抱き離婚記念日雨になる
眉描いて守るべきもの何もなし
旅人として黙祷の群れの中
前の世の扉がひらく蛍の夜
身の内の鬼立ち上がる曼珠沙華
あかつきの夢に母きて歌いけり

春を待つ眉をきれいに整える

良い女流作家の句集が世に出ることは、川柳塔のみならず柳界の在り方に裨益すること大なるものがある。

朱夏さん、厳しい道をますます厳しく歩き続けて下さい。

平成十六年九月九日

橘　高　薫　風

川柳句集

転生

目次

序―橘高 薫風……
時雨……
絶叫……
木霊……
夏野……
狐雨……
跋―八木 千代……
あとがき……

時

雨

泣きにきて赤い夕陽を見て帰る

過去ばかり恋して錆びるオルゴール

生き急ぎちいさな旅をくり返す

靴ばかり買って淋しい生まれつき

しみじみと戸籍謄本読んで　秋

背負わねばならぬ荷物がそこにある

読みさしの本に挟んである昨日

靴を履きつぶして父は風の中

藪柑子母の我慢に灯を点す

不揃いの食器で庇いあっている

中将湯母は女でありしよな

考えて考えすぎて折れた葦

アスパラの青よ少年老い易し

わたくしを守るニンニクぶら下げて

母からの手紙ひらけば酢の匂い

運命線のどこかで割れる飯茶碗

誰彼の訃を蟹雑炊吹きながら

何年も止まったことのない時計

人に倦み人を恋して秋灯下

真っ白い皿でありたし生き難し

絞られた形にわたし乾いている

コンビニのあかりを目指す漂流者

人間にもどる聖書に手を置いて

救命具はひとつあなたはどうします

沖は昏くてサンタクロースを待っている

わたくしを匿うために木を植える

ふらんすパンほどの頑固は持ち合わす

母が死んだ時間になると目が覚める

人生の秋がきている膝頭

見かけ倒しはある女にも柿の実も

いまここにいるわたしとは誰だろう

ウエストを締めも緩めもせず生きる

人間らしい器だ水が漏れている

時雨きて身を庇うもの何もなし

思いきり顔を洗ってあれは　夢

割箸を折り捨てるように別れ来し

もう誰も待ってはいない橋の上

絶叫

八合目あたりの恋がおもしろい

謎解きの下手な男を道連れに

ポテトチップスかるい悩みを噛みくだく

誘惑にころぶ林檎の木の下で

道ならぬこと思わせるひとの指

淋しさと背中合わせに恋成れり

花びらのような下着が唆す

猫が好き中途半端な男より

恋終る りんごに歯形つけたまま

火を点すさむい男の肋骨に

何の科あって柘榴は身を曝す

絶叫の固まっている椿の実

鬼も蛇も帰っておいで淋しいよ

失った時間を抱いているたまご

住み慣れた街で甲羅を干している

いらくさで編んだ冠ならあげる

身の内に確かに熟れてゆく木の実

着脹れて男をひとり見失う

合鍵を返し唇がさむい

こいびとをかえるわたしのころもがえ

こぼれ萩 わたしに何が出来たろう

ひとかわを剥けば傷だらけのりんご

葦に風吹けば肋がきしきし鳴るよ

わたくしを跨いで猫が出て行った

魂が売れ残っている冬の本棚

髪を切る男をひとり斬るために

放置自転車の中に歪んでいるわたし

片しぐれ傘もおとこも還らない

いつも赦し許し濁ってゆくばかり

小便小僧の肩のあたりへ目を逸らす

歯の治療やっぱり恥ずかしい時間

キコキコと自転車を漕ぐ逃亡者

沖に出たなら傍観者になろう

テトラポットのひとつはきっと母だろう

ひまわりの群れ匿ってくれたのか

老人と鳩群れている無音の昼

生ぬるいトマトを齧るヒロシマ忌

青臭き息を放ちて夜歩く

まなうらに蛍の灯る危うい夜

咳込んで古い言葉を吐き尽くす

暗証番号におとこをひとり封印す

目覚ましが鳴ってこの世に蘇る

死者を送る花が競っているではないか

人来たり人去りわたくしに西日

時々はうしろ姿を確かめる

総身に蔦を這わせて生きている

しっかりとルビ振っておく現在地

木

霊

別れたくないと叫んでから埴輪

蛇になる予感に鏡伏せておく

問い詰めて夜の硝子を曇らせる

耳鳴りが冬の鏡のうしろから

海の青ひとつぶ耳にぶら下げる

やわらかい紐を境界線にする

手の中の蛍を放し髪を梳く

私を泣かせた人が咲いている

約束を守り通してきて化石

摺り足で誰か近づく花の闇

まぼろしの刻を分けあう死者生者

わが死後の黄菊白菊声もつべし

椿の朱奪いつづける人でなし

雛壇の闇をめくれば魑魅魍魎

陣痛が始まる春の海峡から

へその緒を大事にもっている港

伝えてはならぬ言葉を水に書く

てのひらにその日暮らしの鶴の羽

眉描いて守るべきもの何もなし

大根がすこし萎びて安息日

恥多き日を下駄箱にしまい込む

猫を抱き離婚記念日雨になる

思いきり泣けばいいのに唐辛子

夏椿すこし黄ばんで生きのびる

ひまわりの丈おとうとを思うなり

夫婦茶碗に三角波が立っている

時刻表閉じると海は消えていた

哀号と身を細うして百済仏

ゴルゴダの丘へも続く石畳

バテレンの足音うしろから時雨

旅人として黙祷の群れの中

黙示録の一頁から稲光

教会の扉はいつも開いている

逆さまに貼った切手で秋が着く

左手を庇う右手のあり ひとり

あかつきの夢に母きて歌いけり

前世からの腓返りをひきずって

生きているだけで切ない腕時計

逝くときは野に在る花を食べ尽くす

生きている唇の淋しさなど言わず

風船を手放してから失語症

脱皮して桃の匂いのするからだ

前身を問われ舞うしかない揚羽

崖っ縁のさくらにふっと誘われる

陽炎のカーテン抜けて精霊は

前の世の扉がひらく蛍の夜

いつか見た夢のつづきの水の声

暁闇に眼凝らせばイエスの目

夜の木霊耳押さえても押さえても

つぎつぎに蜻蛉生まれる水の闇

旅をして水の匂いを連れ帰る

春愁のたとえばぬるき猫の舌

春節の淋しき宵のものの影

静脈が泡立つさくら散るまでは

菊を焚く死者と生者が出会う刻

夏

野

体温を盗まれしろい曼珠沙華

風花や見つめあわねば遠きひと

知らざりし水仙切りし朝のこと

かじかんだ手で庇われている蕾

渾身の力で紅を刷くさくら

逝く春の水に睡魔のある如し

転生のあさきゆめ見し観覧車

りんご拭く罪の匂いを確かめて

無花果が繁るわたしの出生地

身の内の鬼立ち上がる曼珠沙華

剃刀が滑るちさき風立ちぬ

鈴虫を闇に放してから無口

捨つるもの多きを恥じぬ桐の花

猫の子を淋しがらせる笛を吹く

本日の機嫌ところにより曇り

淋しいと言えば笑ってくれた象

指狐コンと啼かせて忘れよう

わたくしを放す死人のポーズして

掴まれたかたちに傷が癒えている

現世の途中経過を狐雨

一心に包丁を研ぐ花の昼

鬼灯の朱は鮮やかに死者還る

灰になるまでの時間を歌う骨

数え日の鳩ほうほうと寂しかり

美しい空き箱ばかりこの世とは

運命を垣間見ている万華鏡

頑なに柘榴のなかの赤い闇

井戸あれば覗きたくなる曼珠沙華

能面の裏に三つの寒い穴

七十五日の視線にわたくしは木乃伊

胡桃ほどの子宮で考えた結果

鳥籠に戻るこころに痣つけて

仏壇が揺れる誰か還って来たらしい

千筋の髪で狼煙を揚げている

身の内の藪に隠したマタイ伝

砂糖菓子壊れて還らない夏野

哲学者の顔して一枚の木の葉

あと一枚皿が足りないまま夜明け

合歓の花ふわりとおとこ匿いぬ

片翼は夏の陽射しに傷ついて

風狂の果ての貌して野の一樹

塩からいくちづけ返す恋人よ

淋しさを燃やして秋を暖める

手袋に人恋う指の潜みおり

運のない右手左手母ゆずり

簡単に人は忘れる男の名

人の世を泳ぎ疲れた時刻表

鳳仙花はじけて母が零れ出る

見つめあえば椿ほうほう開きだす

振り仮名の距離に淋しい顔と顔

新しいわたしのために胡桃割る

狐

雨

振り出しに戻ってみれば枯野なり

冥界の母来て白い花降らす

包丁を眠らすあたり昼の闇

桜満開死ねという生きよという

眠るにはほどよき墓地の桐の花

祭壇は満員散歩していよう

隅の椅子にけむりのように座っている

とりあえず蝶を匿う夢の中

脳死論午後の桜が熱っぽい

めいめいに晩年という沖昏し

見るべきは見つ転生の蛍とぶ

彼の世よりひと呼び戻す曼珠沙華

継ぎはぎの言葉で死者を暖める

蛍火の温さは人を赦せそう

夜が明けるまでに言葉を捜さねば

身の内の綻びに棲む秋の虫

回転ドアくるりと此岸彼岸かな

冬眠をしたまま死んでいる音符

いい息になるまで桃と見つめあう

春愁の葱きざむとき世に遠し

わたくしを映して鏡ひび割れる

面白う一夜二夜は花狂い

死は不意にバラ一輪に宿るなり

風呂の蓋ほどの存在感はある

石鹸が同じ匂いの共犯者

心経のところどころにある迷路

地図にない川を渡って父母還える

目覚ましをあの世この世の境界に

死んだふりしている蜘蛛の時間帯

夢に鍵掛けねばわたし毀れそう

黄砂降る古きノートは閉じるべし

影踏みの影が還ってこない夜

夢のあとさき薔薇が枯れている

分け合うた夢を返してからさむい

覚悟して薔薇は剪るべし奪うべし

鏡掛けめくると非常口だった

わたくしが死ぬとき地球道連れに

ひまわりの明るさほどをさしあげる

わたしより淋しい人が群れを出る

旅の終りの掌にあるレモンの黄

春を待つ眉をきれいに整える

橋を渡ったことはまぼろし狐雨

跋

「やっと薫風先生からお許しがでました」受話器から朱夏さんの弾んだ声が響いてきてしかも「私、句集を出そうと思うのですが」此の声は遠慮がちながらも、ひたむきの音調でした。義に厚いところはおそらく親譲りの性格で、それに透徹した眼を生来備えている上に直情の持ち主では、心の奥は葛藤に揺れ、また、しがらみに凭れては藻掻くという様子ではなかろうかと、川柳のおつきあい以上に何となく気になり案じ続けていたのですが、今度、自分を吐き尽くすほど曝しての作品の群れを一気に読むことになって、一句一句が鉛筆の軸を貫いて、青い炎が立ち上るような幻覚に似たものさえ感じました。

靴を履きつぶして父は風の中
母が死んだ時間になると目が覚める
わたくしを守るニンニクぶらさげて
救命具はひとつあなたはどうします
ふらんすパンほどの頑固は持ち合わす

時雨きて身を庇うもの何もなし

朱夏さんの出生のお名前は文子さんです。雅号や作品の印象からは、華やかな雰囲気を受けますが、その気体のような衣裳の中身はひとりで生き抜く苦しみと、それを包み通す才能から、文子さんという名の由来を思わす立ち姿がときどき見え隠れするようです。

納得のゆく比喩を使いこなす技量もあり、その句は多彩で目に立ち、人気もあるのだと思いますが、此の年齢ですでに人生を見据え数々の試練を経て、この作品集を「転生」と題されたのかと、またも思い返します。

何の科あって柘榴は身を曝す
絶叫の固まっている椿の実
鬼も蛇も帰っておいで淋しいよ
失った時間を抱いているたまご

こぼれ萩　わたしに何が出来たろう
沖にでたなら傍観者になろう
総身に蔦を這わせて生きている
別れたくないと叫んでから埴輪

朱夏さんの叫びは読んで痛みを受けます。自身を刺しながらの叫びだからでしょう。

哀号と身を細うして百済仏
逆さまに貼った切手で秋が着く
夜の木霊耳押さえても押さえても
静脈が泡立つさくら散るまでは
わが死後の黄菊白菊声もつべし
身の内の鬼立ち上がる曼珠沙華

能面の裏に三つの寒い穴
鏡掛けめくると非常口だった
眠るにはほどよき墓地の桐の花

終りに近くなれば諦観の息も聞こえますが、一連の烈しい作品群は朱夏さんの私小説とも伝わります。しかし未だ巻の上と云えます。凄まじい生の軌跡は共感を呼んで感動したのですが、敢えて問題を探すと遊びが欲しいと思うのです。真実に打たれ共鳴してもやはり逃げ場を求めたい人間は多いのです。

傍観者になれぬほど迫力に押されてしまいます。朱夏さん。どうか巻の下という意識も持って、この後とも長く道をきわめて下さいますように。

平成十六年　秋の日

八木千代

あとがき——

泣きに来て赤い夕陽を見て帰る　　朱　夏

私の川柳の原風景を辿ると紀の川があり、原っぱがあり、城跡がありました。海に近い河口の中洲には鴎が群れ、川岸には葦がざわざわと茂り、春には白い野茨が、秋にはぽっと月見草が野原いっぱいに咲きました。

淋しいとき哀しいとき、葦に隠れて泣きました。なにが哀しかったというのでもなく、少女時代の単なる感傷だったと今にして思います。

和歌山に「ニュース和歌山」というミニコミ紙があります。そこをバックに「三幸川柳教室」が生まれました。指導者は中筋三幸先生。三幸先生は垂井葵水氏と共に、和歌山の川柳界の草分けで、私財を提供されて指導にあたられ、また清水白柳、岸本水府その他、関西の高名な川柳人と交流のあった方です。

ほどなくして三幸先生が亡くなられたあと、菅井智水庵先生（本名、康郎）が指導者になられました。当時、大証二部上場企業の代表取締役社長でした。智水庵先生は財界人には珍しく弱者に優しく、誠実なお人柄でした。私の川柳の最初の恩師は智水庵先生です。

「まあ良いじゃないですか」何か事があるたびに、そうおっしゃった先生の眼鏡の奥の柔和なまなざしを、私はいつまでも忘れません。

おもいきり顔を洗ってあれは　夢　　朱　夏

私が川柳に開眼するきっかけとなったのは米子の「きゃらぼく忘年句会」でした。石森騎久夫、寺尾俊平、田中好啓、森中惠美子、大西泰世、前田芙巳代、石部明……現代川柳の素晴らしい作家の方々と同じ空気を吸っていると、感激

した忘年句会を昨日のように思い出します。

北海道、福岡、名古屋、鳥取、もちろん関西の川柳人との出会いがあり、川柳の楽しさは人との交流にもあると実感しました。そんな私を八木千代先生は「どれだけ余所へ行ってもいいけれど、大きくなって戻っていらっしゃい」と励ましてくださいました。

「うまい句よりも佳い句を…」と厳しく温かいまなざしで見守ってくださった川柳塔の、今は亡き小出智子先生。

「お前さんは句は下手だけど、熱心なのがよろしい」と力づけてくださった寺尾俊平先生の笑顔も忘れられません。

紆余曲折、余所見をし、道草をくい、足踏みしながら、今日まで私が川柳を続けてこられたのも、川柳塔の暖かい絆に支えられ、庇われていたからだと心から感謝しております。

最後になりましたが、ご入院中にもかかわらず、身に余るご序文を賜りました橘高薫風先生、優れない体調を顧みず、お心のこもった選句をはじめ、跋文をお引き受けくださいました八木千代先生、本当にありがとうございました。

私の居場所を求めて、私なりの「人間陶冶の詩」を模索したいと思います。ありがとうございました。

平成十六年　初　冬

木本朱夏

略　歴

木　本　朱　夏（きもとしゅか）

昭和15年　和歌山市生まれ
昭和36年　帝塚山学院短期大学　文科卒業
昭和57年　三幸川柳教室に入会　川柳を学ぶ
昭和62年　川　柳　塔　同　人

現　在

- 三幸川柳教室　副　主　幹
- 川　柳　塔　社　常任理事
- 産経新聞和歌山版　川柳欄選者
- 毎日文化センター　川柳講師

定価　1,000円

川柳句集 **転　生**　木本　朱夏

発　行　平成17年2月4日
著　者　640-8392 和歌山市中之島871
発行者　木　本　朱　夏
電話　073-428-0291

印刷所　美研アート